

平成28年度  
福島大学 人間発達文化学類 スポーツ・芸術創造専攻 推薦入学試験  
小論文<芸術>

問題

以下のA. (音楽), B. (美術) から、一題を選んで論述しなさい。

選んだ問題の記号を、解答用紙の【 】に必ず記入すること。

(注意事項：解答用紙の1マスを1字とする。句読点も、行末の場合を除き1字と数える。算用数字やアルファベットは、1マ스에1字入れることとする。)

\*原文が常用漢字以外のところは、一部「ふりがな」をふってあります。

\*出題に当たり、原文の一部を変えています。

A. 次の資料は、ニコラウス・アーノンクール<sup>註1</sup>著、樋口隆一訳『古楽とは何か』(音楽之友社、1997年)から、一部抜粋したものである。これを読んで、下の(1)(2)の設問に答えなさい。

この部分に記載されている文章については、著作権法等の問題から公表することができませんのでご了承願います。

この部分に記載されている文章については、著作権法等の問題から公表することができませんのでご了承願います。

- (1) この文章内容を、300字以内で要約しなさい。
- (2) アーノンケールの主張する演奏の二つの立場を明らかにしつつ、音楽演奏の基本的な立場について、あなた自身の知識や経験を交え、700字以内で論じなさい。

B. 次の資料は、伊藤亜紗『目の見えない人は世界をどう見ているのか』(光文社新書, 2015年)から、一部抜粋したものである。これを読んで、下の(1)(2)の設問に答えなさい。

### 「鑑賞とは自分で作品を作り直すこと」の意味

作品を鑑賞するとは自分で作品を作り直すことである、と書きました。あまり一般的ではない意見かもしれませんが。ここで少し説明を加えておきたいと思います。

鑑賞とは作品を味わい解釈することですが、鑑賞をさまたげる根強い誤解に、「解釈には正解がある」というものがあります。多くの人が「正解は作者が知っている」あるいは「批評家が正解を教えてくれる」と思っている。もちろん、好き勝手に解釈していいというものではないですが、だからといって自分なりの見方で見てはいけないと構えてしまっては意味がありません。

大学で現代アートを教えるにも、まずは学生に「武装解除」させることが必要です。特に現代アートは、感覚だけでなく知性にも重点がありますから、自分なりに能動的に解釈する姿勢が絶対に不可欠。受験勉強の延長で「この作品の正解は……」と構えてしまう学生の肩の力を抜いてあげる必要があります。

それでどうするか。まずは何の説明もなしにバーンと作品を見せてみます。たとえば、赤い地の上に滲んだ四角形が三つ並んでいる絵。三つの四角形は上から茶色、濃紺、オレンジ色です。そしてそのままこちらはだまっている。アクティブラーニングという名の放置プレイなのですが、そうでもしないと学生たちは自分の言葉でしゃべりだしません。

しばらくすると、学生が手をあげ始めます。「海苔の上に焼き鮭がのっているお弁当を上から見たところ」。

件の絵はアメリカのマーク・ロスコという画家の絵なので、焼き鮭をイメージして描いた確率は限りなくゼロに近いのですが、だからといってそれを否定してはダメ(そして不思議なことに、なぜか毎年必ず「鮭弁説」をとなえる者があらわれます)。

なるほどね、と言いながらさらに別の学生の意見を待っていると、「布団が敷いてある」とまたまた日本人丸出しのコメントが出てくる。さらには「ポストの中に隠れて外を見ている」や「火事で鉄製のドアが燃えている様子」という非日常的な設定や、中には「滲みの効果で、ぱっと見たときに絵ではなく動画に見えました」なんていう解釈も飛び出します。

要するに、自分が感じたその絵の意味を言葉にしてもらおうのですが、物理的には同じ絵でありながら、人によって全く違ったふうに見ていることに、学生たちにまず驚いてもらうわけです。これが、「鑑賞とは自分で作品を作り直すことである」ということの意味です。ソーシャル・ビュー\*のワークショップが終わったあとで、ある参加者が口にしていました。「みんなそれぞれ、頭の中で作品を作っているんですね」。作品を見てそれを意味付けようとすると、結局自分なりに作品を作り直すことになるのです。

## 他人の目で物を見る

ただし重要なのは、ひとつの作品からさまざま解釈が生まれる、というその多様性を確認することではありません。そうではなくて、他の人の言葉を聞いたうえで絵を見ると、本当にそのように見えてくるのです。鮭弁だと思って見るとその絵は鮭弁に見えるし、ポストの中だと言われれば確かにそうも見える。物理的には同じものでも、見方によって、本当に全く別のものに見えてくるのです。

鮭弁とポストの中では、見ている側のシチュエーションや空間的な開放性がまるで違います。鮭弁の場合は、濃紺やオレンジの四角が地（ごはん）の上に乗っている、と見るわけですが、ポストの中にいる場合は、真ん中の濃紺の四角は穴であり窓です。つまり完全に閉じ込められた状態にあるわけです。視線の向きも違います。鮭弁は上から見下ろす垂直方向の視線、ポストの中は画布をつきぬけて奥を見ようとする視線です。鮭弁としてのマーク・ロスコと、ポストの中としてのマーク・ロスコは経験として全く別物です。

にもかかわらず、人はそのどちらをも、実際に感じるすることができます。言葉を介して、他人の見方を自分のものにすることができます。「ああ、わかった」と納得できた瞬間、その人の見方で作品を見ることができたわけです。まさに「他人の目で物を見る」経験です。（中略）

ソーシャル・ビューとは、この「他人の目で物を見る」経験としての鑑賞の魅力を、最大限に引き出すやり方であると言えます。そのためには、やはり実際に作品を囲んで話していることが重要です。作品を見ながら耳で言葉を聞くと、それが変形する様子をダイレクトに実感することができるのです。原理的には各自の解釈を文字に起こして、それを読みながら鑑賞する、ということもできるでしょう。けれども、実際に自分のとなりにいるその人の力によって目の前の作品が変形していく驚き、そのライブ感に勝るものはありません。（中略）

作品を鑑賞するとき、私たちは「頭の中で作品を作り直している」わけですが、この「頭の中の作品」はとてもやわらかい。このやわらかさは、まさに見えない人がふだんから経験しているイメージのやわらかさに他なりません。見えない人の中で、言葉の力によって「作品」が変化していくように、見える人の中でも、それはどんどん形を変えていくのです。他人の目で見る面白さ、他人の見方を自分で実感する豊かさを、ここでは見える人も経験するのです。

\* ソーシャル・ビュー…目が見えない人と見える人がグループになり、作品について対話しながら鑑賞する方法。

- (1) この文章内容を、300字以内で要約しなさい。
- (2) 美術作品の鑑賞に対するあなたの考えを、資料と関連付けながら、あなた自身の知識や経験を交え、700字以内で論じなさい。

平成28年度入学試験 小論文「出題意図」

(入試情報公開用)

人間発達文化学類 スポーツ・芸術創造専攻  
推薦入試Ⅰ ( 芸術 (音楽・美術) )

音楽または美術に関する文書資料を提示し、それに関して1000字程度で論述させることにより、読解力、論述能力、および芸術に関する知識や関心を総合的に見ることをねらいとする。